

### 三、明行成就

一。本文。

「是名菩薩摩訶薩隨順五種法門所作隨意自在成就。如何所説身業口業意業智業方便智業隨順法門故。」

一。隨順法門。

已下五念行の成就を明かされるのである。まず、論文を引き、次に註釈せられる。ここに出したのは、浄土論の文である。次の隨意自在者已下の文から註釈である。表示すれば

論文 是名菩薩已下

明行成就

別釈 隨意已下

註釈

総釈 言此

「是」とは、智慧心・方便心・無障心・勝真心の四心成就によつて、清浄仏土に得生することである。故に是とは四心成就を指すのであるが、遠くは起観生信章已下の全てを受け結んで、是をと示されたのである。起観生信章の初めには、

「起観生信者此分中又有二重。一者示五念力二者出五念門。示五念力者云何観云何一生信心。若善男子善女人修五念門行成就畢竟得生安樂国土見彼阿弥陀仏。出五念門者何等五念門。一者礼拝門二者讚嘆門三者作願門四者觀察門五者回向門。」

と、五念力及び五念門が標出されてある。今、四心成就をこの五力の標文に結合して、四心成就得生仏土そのままが、五念業成なることを示されるのである。四心得生を以て五念所成に合するが故に「是名……」と云われるのである。五念行が成就すれば畢竟して安樂国土に生じ大涅槃を証するのである。これ即ち五念力と云われる所以である。

一。「是を菩薩摩訶薩、五種の法門に隨順して、所作意にしたがつて自在に成就したまえりと名く。」

五種法門とは、礼拝、讚嘆、作願、觀察、回向の五念行のことである。この五念行こそは往生浄土の法門なるが故に、この五種法門に隨順せずば、往生浄土することは出来ないのである。隨順とは、修行する所、如法にして違逆することなきをいう。即ち五念行の如実修行である。五種法門に隨順すること即ち四心成就することである。勝真心こそは、この五念行に隨順せる心である。

「所作隨意自在成就」とは、所作とは、菩薩が彼国に至つて得る所の動静出沒をいうのである。出沒意にしたがつて自在に成就するとは、還相利他の自在なることを明されたのである。

一。「如向所説身業口業意業智業方便智業隨順法門故」  
五種法門に隨順する五種業を示されるのである。蓋しこの五種の業こそは、菩薩の全人格である。身口意の三業、それに智業、方便智業の五種の業によつて、法門に隨順するが故に隨順法門と云われる。

一。本文。

「隨意自在者言此五種功德力能生清淨仏土出沒自在也」

一。隨意自在。已下註釈であり、註釈中の別釈である。論の隨意自在ということとは、この五種法門功德力が、菩薩をして淨土に生ぜしめ、出沒自在ならしめることである。鸞師深く論の義を探ねて、隨意自在を出沒自在の義とせられたのである。

出沒自在とは、出沒とは、六要鈔に二解を出す。初は入出二門に約して説く。出とは出門、没とは没入で入門、故に出とは還相利他を指し、没とは往相自利を示すとす。後は、出沒共に利他に約して、出とは穢土に出でて衆生を利すること。没とは還つて本国に入ること説かれる。この外、一説には、総じて一切の所作の事業を出沒となすという説あり。これ「動靜己に非ず、出沒必ず由あるがごとし。」とある場合の如くである。

一。本文。

「身業者礼拝也。口業者讚嘆也。意業者作願也。智業者觀察也。方便智業者回向也。」

一。隨意自在(続)

論の隨意自在ということは、五種法門の功德力が、菩薩をして往生淨土を可能ならしめ、出沒自在の如くならしむことであつた。しかるに菩薩の生活は、全てこれ法門に隨順せるものである。法門に隨順するが故に、隨意自在に出沒二利を成就することが出来るのである。

然れば菩薩の何が如何なる法門に隨順するのであるか。それを示されたのが、即ちこの文である。即ち菩薩は、身業に於いて礼拝門、口業に於いて讚嘆門、意業に於いて作願門、智業に於いて觀察門、方便智業に於いて回向門に隨順するのである。これ正しく菩薩の五業が五念行に隨順することを示されたものである。これ即ち淨土の菩薩の修行の公準である。かく菩薩は、五業を以て五念門の行を行じて、五種の功德力を得、清淨仏土に生じて出沒自在なるを得るのである。

一。本文。

「言此五種業和合則是隨順往生淨土法門自在業成就。」

一。五種業和合。

「此五種業和合」ということについては、様々な説がある。一説には、五種業を全て願生の事に為し、五念行を修するに、各別之志求に非ざるが故に和合というを示す。これ浄土の法門に随順して願生するのであるが故に、五念各別の志求のあらうはずがない。これを和合というのである。

一説には、五念行が信と和合すること。即ち行が信を離れざるをいうととる。これは大事なことであろう。身業には礼拝門を行じ、口業には称名讚嘆し、意業には浄土に願生するかに見えて、しかもそれぞれが一に融けず、如実でないのは、五念行が一心帰命の信と和合せざるが為であろう。行にして信を離れるならば、信も如実の信でなく、行も亦如実ではなく、往生の業事成弁することは出来ないであろう。この説は又、五念が法徳自然に妙楽勝真心の一処に和合すともいうことが出来る。一処に和合するは、法自然の徳の然らしむる所である。

次には、自利利他二利互に成就するを和合とつた説がある。これが五念成就の位を指したものである。入門自利は出門利他に、出門利他は入門自利に互成して自在の業成ずるのである。

次には又、法と機とに分つて二意ありとせる説である。即ち一には体徳に約せば、五念各各別の相を泯して広略自他不二の妙楽勝真心を成ずるを和合という。二に機に約して云えば、五念行は機上の相発であつて、一信心の相続の相に外ならない、故に行者にありては、唯願力を仰ぐ相であつて五念の別相を見ず、此を和合というといふのである。この二は共に同じく往生浄土の法門に随順する。即ち初は入一法句の法門に、後は願心莊嚴の法門に随順するを示せるものである。

已上、何れの説をとつても間違ひではないが、因に約せば、五念行は、一心帰命の大信の相発發展せるものであるから、信行和合というのが、わかり易く、果に約して言えば、二利互成の説がいいであろう。五念を成就して自在業成ずると云えば、自利利他の成就に外ならないが故である。いづれにしても、五種業は、法徳自然のままに渾然和合融会して一になつていないならば、全我の事実ということとは出来ない。

#### 一。自在業成就。

自在業とは、浄土に往生して、出沒自在なることを自在という。即ち或は浄土に入り、或は浄土を出るに、入出自在なる義である。業とは、因業、即ち出沒自在なる因業のことである。五念行が具足成就すれば自在の業具足する。因業成弁するを業成就というのである。

今の文の読方に二あり、即ち

「この五種の業和合せり則ち是れ往生浄土の法門に随順し自在の業成就す。」

「この五種の業和合せり則ち是れ往生浄土に随順するの法門自在の業成就す。」

前の如く、往生浄土の法門に随順す、と読めば、往生浄土の法門に随順する時、入出二門自在の業が円満するとなり、後の如く、往生浄土に随順する法門自在業成就すとすれば、法門即ち自在なりということになる。二義共に通ず。

五種和合して浄土の法門に随順すれば、法門自爾の徳、自在の業、即ち出沒二門の大因を円満成就するのである。

一。結言。

願事成就章を了った。私は先には、「柔軟心」の題下で、次には、「一心の体徳」という題で長い間、一心五念の法門を頂戴した。実に、一心こそは、如来本願によつて行者の上に回向成就せしめたまう全てである。

この一心こそは、智慧門慈悲門方便門の三門、遠離我心貪著自身、遠離無安衆生心、遠離供養恭敬自身の三法、無染清浄心、安清浄心、樂清浄心の三心、已上の九種の法門は、般若と方便と無障と妙樂勝眞の四心と名義撰対して、遂に略一処に妙樂勝眞心を成就するのであつた。しかして菩薩は、この四心によつて五念行を成就し、清浄仏国に生ずることを得て、出沒自在の業事成弁することが出来るのであつた。これ論の意は、行者としての菩薩の發揮する徳として示されたものであるが、しかしながら、かくの如き功徳成就の相が、一心より相發するは、本より、如来回向の大行の上にごの徳を内具するが故である。即ち、法蔵因位に於いて、この四心九法の法門、五念行の業事成弁して、自在の業成就したまえるが故に、行者は唯願力を仰信して念仏報謝の一道にあるに、よくかくの如くなることを得るのである。

されば、九法四心の法門、一心五念行は、法体成就して円満なるものである。行者一心相続の背景にはまことに、如是の廣大なる法門あるが故に、行者は聞信の一念によつて不退転の一道にあり得るのである。一心の体徳の廣大知るべきである。(終)